

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

9

■ 第3章「制御不能」

ア版

14年(平成26年)5月27日(火曜日)

福島第1原発5、6号機の運転員 井手愛里(28)は3月13日、避難所となつた川俣町の小学校の体育館で、1号機爆発の様子を映し出すテレビを見じられない思いで見つめていた。「おまえ、何でここにいるんだ。俺たちを監視してるのは?」「え?」

避難していた住民の男性だった。井手は東京電力の青い作業服を着ていた。「いえ、違います。私も避難しなきゃならない体なので」。井手はそう言うとおなかに手を当てた。妊娠4ヶ月だった。

井手は東電初の女性運転員だ。12

東電初の女性運転員

日朝まで5、6号機中央制御室で事機だった。2基とも地元企業に勤めていた父親が建設に携わっていた。原子炉建屋内のパトロールやバルブ操作などをする補機操作員を経て2地元の進学校を選んだ。だが福島第2原発運転員だったおじの勧めで制御室を見学する機会があり、考えが変わった。

制御室の計器や操作パネルを見て「かっこいい」と思った。中でも、壁に張つてあつた運転員たちの写真に目を引かれた。当直長、副長、主任、副主任、主機操作員、補機操作員。女性の写真は一枚もなかった。

「やつてみたい」

入社後の配属は偶然にもらう、6号

09年7月、原子炉を運転する主警備会社勤務の夫は5、6号機操作員になった。「父がつくった屋の出入りを管理するサービス建屋原発を娘の私が動かす。とてもうちにいて、避難する途中だった。夫をしかつたのを覚えていました」

3月11日の震災発生時、5、6号御室中に届くよろづ大声で復唱した。

機は定期検査中だった。制御室近くの部屋で検査の準備作業をしていた「今、津波が来てるから、外に出ないで」

井手は、搖れが収まるのを待つて制御室に飛び込むと、6号機の制御盤消えた。5号機の非常用ディーゼルを確認した。

発電機(DG)が津波で停止した。だが約40分後、6号機はDG1基が運転を続

井手のPHSにかかる電話で状況が一変した。聞いたことを考えたら避難した方がいいかと思ふが、どう切迫していましたけど、やっぱり最後まで制

した声だった。御室にじこまらなきゃならない。そ

「津波が来てる。れが運転員なんです」

絶対に外に出る(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 前田有貴子)



東日本大震災発生当日の福島第1原発5号機(写真左)と6号機の中央制御室 2011年3月11日(東京電力提供)